HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	観光創造サバイバルガイド
Author(s)	岡本, 健
Citation	Sauvage : 北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院院生論集, 8, 37-42
Issue Date	2012-03
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/49159
Type	bulletin (article)
File Information	Sau8_004.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

観光創造サバイバルガイド

岡本　健
観光創造専攻 博士後期課程

１．はじめに

本稿は、「国際広報メディア・観光学院 観光創造専攻」という大学院に、修士課程一期生として在籍し、5 年間を過ごした著者による、サバイバルガイドである。サバイバルガイドというとなんだか大げさだが、大学院での過ごし方について、主に研究に焦点を当てて、その流れを示したい。これから大学院に入学する皆さん、博士後期課程進学を考えている皆さん、にとって有益な情報になればと思い、ここに書かせていただく。

以下では、まず、この「国際広報メディア・観光学院 観光創造専攻」という、興味深い研究領域が、以下に成り立ったのかを整理する。次に、その「国際広報メディア・観光学院 観光創造専攻」で過ごした 5 年間の経験から学んだことを述べたい。ただし、これは、あくまで私個人の 5 年間の経験に基づくものである。観光創造専攻ができた時に修士課程の一期生として入学し、右も左もわからぬところから走りだした者の記録である。なので、この過ごし方や考え方が正解と言えるかどうかは、自分でも判断のつかないところである。この点については、読者諸賢にゆだねたい。皆さんの大学院生活を豊かにする上で、何かの参考になれば幸いである。

２．広大なフィールドに放たれる

「国際広報メディア・観光学院 観光創造専攻」という名称を冠した大学院が存在すると聞いて、そこでなされている研究内容をご想像いただけるだろうか。「国際広報メディア・観光学院」である。国際とは何か、広報とは何か、メディアとは何か、観光とは何か。それぞれを単独で取り上げて研究するだけでも、膨大な量の思索が必要であろう。しかも、それぞれを接続させることによって、分野を創出してみることも可能だ。国際広報、広報メディア、国際メディア、国際観光、観光広報、観光メディア、メディア観光、などの様々な興味深い組み合わせを考えることができる。ここまででも、すでにかなり広大な領域に話が広がっているのだが、次の専攻名称でまたもや面食らうことになる。観光「創造」専攻…。大学院は「研究」をするところでは？「創造」とはこれいかに…。不安になるのも仕方がない。なにせここは未開拓の土地なのである。ここに所属する院生は、「国際広報メディア・観光学院 観光創造専攻」という広大なフィールドに放たれることとなる。

３．観光創造専攻の誕生

さて、ここで放り出されたフィールドについて、その出来上がり方を見ていきたい。まず、北海道大学にはじめに出来上がったのは「国際広報メディア」という名称の大学院である。当時私は、文学部で認知心理学を学んでいた。その時私は認知心理学というフィールドに夢中であり、この新たなフィールドに対しては「なんぞよくわからないものができたなぁ」くらいに感じていた。それから、『北海道大学観光学高等研究センター』が立ち上がる。観光に関する研究機関である。その後、「国

際広報メディア」というフィールドに、さらに「観光」が追加され、「国際広報メディア・観光学院」というフィールドが出来上がったというわけである。

人の興味というのは不思議なもので、しばらく同じことをやっていると、ふと違うことがしたくなってくる。私は、「国際広報メディア・観光学院 観光創造専攻」が出来上がることを知った時、認知心理学の分野で大学院に進もうという心づもりで学部生活を送っていた。もちろん学部生の段階である。飽きてしまうほどその分野についてわかっているわけでもなかった。そして、認知心理学は依然として非常に好きで、続けていきたいという気持ちもあった。しかし、「観光」という、おおよそ学問からは遠いと思われる事象が[1]、大学院で研究対象として扱われる、魅力、可能性、に惹かれ、このフィールドに飛び込んだ。

４．とにかく本を読む

観光について学んだことなど全く無かった私は、どういう形で学んでいけば良いのか、よくわからなかった。地図も無くコンパスも無い状態で突然荒野に放り出された感覚である。そこで私が取った戦略は、とにかくめちゃくちゃに走り回ってみるというものだった[2]。つまり、とりあえず本を読んだ。「観光」や「旅行」とタイトルにある本や論文の中で興味のあるものを、とにかく読んだ[3]。いわゆる乱読。この、とにかく本を読むことの効用は、知識が身に付くのももちろんであるが、「問題意識」を確立する、という点にあるように思う。

「文献を読む際に重要なのは量ではなく、質だ！」と言う話はよく聞く。名著をじっくりと研究会で読むというやり方もあるのだとは思う。ただ、私にとっては、全体像がつかめていない状態で、一冊をいくら丁寧に読んでも、書いてあることを自分事として、自分の問題意識と関連付けて理解するのは難しいと感じた[4]。そもそも、その「質」の高さ、低さの判断が自分ではつかない。高いか低いかを判断する、ということは、何らかの価値判断を行っていることになる。そうすると、価値の高いものばかり見ていても、低いものを見ていなければ、判断ができないのではないだろうか。よくあるパターンは、先生が「良い」と言うもののみを読むやり方である。これも、悪くは無いかもしれない。ただ、自分が自分なりの問題意識をもっている場合にのみ、悪くはないと思う。そうではなく、とにかく先生が薦めてくれる「良い」本を妄信する、というのはいけない。それは、本に対して「誰かが価値付けをしているから価値がある」という判断をすることになるからだ。こうした態度は、簡単に言うと、「エライ先生が言っていることは真実」「みんなが言ってい

---

[1] 当時は、やはり「観光？そんな研究分野に進んでも、将来研究者にはなれないね。」というようなことを数名の方々に言われた。

[2] 戦略とは言えないような恥ずかしい戦略だが。

[3] 論文の場合は、「CiNii」というサイトがあり、これで検索するとたくさんの論文がヒットする。書籍の場合は、「国立国会図書館サーチ」を活用する手もあるし、大学図書館や専門書の品ぞろえが良い大型図書館に一日缶詰になり、並んでいる本を色々と読んでみるのも面白い。ふとした瞬間に見つけた、一見関係がなさそうな本が、自分の考えに大きなヒントを与えてくれることはよくある。

[4] 多分、このあたりは多種多様なあり方があると思う。一冊を丁寧に読み切る方が、自分自身の考えを持てる人もいるだろう。

るから正しい」というような考え方である。それでは、大学院生として、物事を自分の頭で考えることにはならないだろう。

同様のことは授業の受け方にも当てはまる。修士課程の場合は、授業がある。授業を軽視していいとは思わないが、その使い方には気を付けた方が良いだろう。授業で言われることを熱心に聞いて覚える、というのではなく、自分で問題意識をもって授業を聞くことをオススメしたい。この「問題意識」というのは重要であるのだが厄介なものでもある。問題意識を構築しないまま大学院に入ってくることもあると思われるし、入ってみて変化することもある。

そこで、観光創造専攻に入ったら、とにかく自分が読みたいと思うものや関連しそうなものを読むことをオススメしたいのだ[5]。そうすると、観光に関する研究についてのおおまかな全体像が見えてくるとともに、自分の興味の範囲もなんとなくわかってくる。こうしたことがわかってくると、自分の問題意識がどこにあり、それが既存の研究のどこに位置付けられるのか、を考えることができる。

５．とにかく現場に行く

とにかく本や論文を読み漁り、授業を受けつつ色々と考えを巡らしていたところ、ネット上のニュース記事で、アニメ『らき☆すた』の聖地に向けてバスツアーが出る、ということを知った。アニメの聖地とは、アニメの背景に描かれた場所のことである[6]。「なんとも面白いこともあるものだなぁ」と思い、指導教員である山村高淑先生[7]とともに、そのツアーに参加することにした。

現場で学ぶことは多い。実際に起こっていることと、本や論文で学んだことと照らし合わせると、「これは新しい観光のあり方なのでは？」とか、逆に、「形は違っているけど、やっていることは古い旅行行動と大して変わらないな」とか、そういった考えが色々と浮かんでくる。さらに、逆の作用もある。現場を見てから本や論文を読むと、それ以前とは読み方が変わってくるのである。以前はさらりと読み飛ばしていたところが、現場を見てからだと、非常に重要な箇所であることに気付くことがある。また、それまでは大して興味が持てなかった領域の論文や本まで目を通そうと思うようになる場合もある。

私の場合は、本を読み、現場に行く、現場に行き、本を読む、この繰り返しで、色々と考えを巡らせ、目的意識を明確化していくことができた。ようやく、地図とコンパスを手に入れ、自分がどこにいるかくらいのことはわかってきたような感じだ。走り回っているうちに偶然山を見つけることがある。山に登ってみると、見晴らしがよく、自分がいるところがよくわかる。偶然、洞窟を見つけることがある。どうやら洞窟の中はまだ誰も調べていないようだ。この洞窟は新しい発見に満ち満ちている可能性がある。偶然、豊かな森林に迷い込むこともある。ここには、数多くの人々が暮らしていて、たくさんの発見が成し遂げられ、盛んに議論されている。こうして、自分のいる世界がわかってくる。

---

5) ここは、自分の価値観を前面に押し出すと良い。誰かが読んでいるからとか、この分野で必須の文献だからとか、そういう理由では無く、自分が読みたいと思ったものから自分のペースで読んでいく方が目的意識を持つ際には効率的であると思う。

6) この現象についての詳細は、本稿でも紹介する論文などでご確認いただきたい。

7) 観光学高等研究センター 准教授

６．とにかく発表する

さて、地図とコンパスによって、自分が今どこにいるのかについてはわかったとして、次はどこへどんなふうに行こうか、ということである。目的地は 360 度どの方向でもいいし、どこまでいっても良い。歩いていくのか、走っていくのか、泳いでいくのか、自動車でいくのか、自転車でいくのか、移動手段も様々である。ここからは、自分の考えを発信し、まとめていくことについて述べたい。

考えをさらに先に進める上で重要なのが、発表をし、ディスカッションをすることである。私一人の発想力は、自分で期待していたよりずっと貧相であり、発表力もぽんこつであった[8]。私の場合、まず、本を読み、現場に行って考えたことを、指導教員とディスカッションさせていただくことで、考えを進めていった。「この現象のこういうところが面白い」「伝統的な観光地と比べて、この部分が違う」「この旅行行動には、このような特徴がある」などなど、長時間にわたってディスカッションをしていただいた。そうすると、対話をしているうちに面白いアイデアがわいたり、自分の考えがまとまってきたりする。この面白いアイデアやまとまってきた考えを発表するのが研究会や学会である。学会の場合は、分野や学会のレベルによって様々で、考えだけを発表することが難しい物もあるので、発表については、指導教員と話し合いの上実施していただきたいが、何らかの発表の場で、自分の考えを発表することは研究を進める上で重要である。詳細については、Sauvage の今号に掲載されている、国内学会、国際学会での発表に関する記事をお読みいただきたい。

私の場合は、様々な学会や研究会で、自分の考えや得られたデータなどを発表していった。すると、様々な先生方から、多くのご質問やご指摘、アドバイス、時にはお叱りを、時にはお褒めの言葉をいただいた。さらに、学会で発表をしたことをきっかけにして、別の研究会での発表の機会をいただけたこともあったし、書籍の執筆機会や論文誌の特集論文での執筆機会をいただけたこともあった。こうした機会を通して、自分の考えを発信する方法について考えることができた。

専門分野や指導教員の先生の考え方によって、このあたりのことは様々なあり方が考えられる。学会発表などはむやみにするものでは無い、という考え方もあるようだ。ただ、私にとっては、自分のアイデアや考えを口頭や文章によって説明し、それに対して反応をいただく、ということは、研究のクオリティを上げるためにはもちろん、モチベーションを維持する上でも重要であったと感じている。学会では無くても良いのかもしれないが、何らかの形で、自分の研究を学外の人に聞いてもらう機会はあった方が良いと思う。そうすることで、自分の研究の社会的意義についても考えることができる。

---

[8] これについては、経験上、ある種のあきらめが必要であると思う。誰しも「もっときっちりと発表できるようになってから人前に出たい」とか「自分ならもっと良い物ができるはずだ」とか思うものである。それはそれで重要なことだと思う。そうした思いが向上心につながり、より良い物を生み出すからである。ただ、この思いに過度に縛られてしまうと、発表を避け続けることとなり、結果、レベルがなかなか上がらない、という事態を引き起こす場合がある。

７．とにかく論文を書く

研究会や学会での発表を元に、次は論文を書く。修士課程には、特に規定は無いが、博士後期課程の場合には、博士論文を提出する際に、2 本以上の予備論文を提出せねばならないという決まりがある。予備論文に該当するかどうか、については、これも様々な場合が考えられるので、指導教員との相談が必要であるが、私は、次の 4 本の論文を予備論文とした。

岡本健

2010a　「コンテンツ・インデュースト・ツーリズム ―コンテンツから考える情報社会の旅行行動」『コンテンツ文化史研究』(3), pp.48-68 ＜2010 年 5 月＞

【ダウンロード URL】 http://hdl.handle.net/2115/43181

2010b　「コンテンツと旅行行動の関係性 ―コンテンツ=ツーリズム研究枠組みの構築に向けて」『観光・余暇関係諸学会共同大会学術論文集』, 2, pp.1-8 ＜2010 年 9 月＞

【ダウンロード URL】 http://hdl.handle.net/2115/43961

2011a　「コンテンツツーリズムにおけるホスピタリティマネジメント ―土師祭「らき☆すた神輿」を事例として」『HOSPITALITY』, (18), pp.165-174 ＜2011 年 3 月＞

【ダウンロード URL】 http://hdl.handle.net/2115/47263

2011b　「コンテンツツーリズムにおける地域からの情報発信とその流通 ―『らき☆すた』聖地「鷲宮」と『けいおん！』聖地「豊郷」の比較から」『観光・余暇関係諸学会共同大会学術論文集』, 3, pp.37-44 ＜2011 年 9 月＞

【ダウンロード URL】 http://hdl.handle.net/2115/47794

これらの予備論文は、全て査読論文と呼ばれるものである。査読論文とは、学会に対して自分の考えを論文にして提出し、それに対して、学会に所属しているメンバーによって審査がおこなわれ、それに合格して掲載される論文のことを指す。

この査読が非常に勉強になる。自分の考えを文章にした時に、それを読んだ人にどのように伝わるのか、どの部分の説明が不足しているのか、論理的な説得力はあるのか、といったことがわかる。なぜそういったことがわかるかと言うと、審査の結果、その理由とともに判定が出されるのである。この判定については、学会によっても異なるのだが、たとえば次のような形である。A 判定は、原文のまま掲載、B 判定は、多少の修正の後掲載、C 判定は、修正の後再査読、D 判定は、掲載無し、といった具合である。そのような判定に至った理由について、査読者からのコメントが返ってくるのである。それを読むことで、自分が書いた文章がどのように読まれたかを知ることができ、これに対してさらに修正を加えることによって、論文の書き方が学べるのである。

こうして論文を執筆し、査読の結果、学術雑誌に掲載されるようになってくると、

これを読んで下さった方から、またアドバイスをいただけたり、研究会での発表にお誘いいただいたり、書籍への執筆機会をいただけたり、といった展開がある。ただし、こういった展開は、ただ待っていてもなかなか無いものである。それではどうするか。私は「HUSCAP[9]」というシステムを活用することによって、論文を広く発信することにした[10]。「HUSCAP」とは、北海道大学学術成果コレクションの略称であり、北海道大学に所属する教員や院生の論文や学会発表要旨、各種スライド、資料などを公開することができるサービスである。上の予備論文として挙げた4本の論文の最後に【ダウンロードURL】と記しておいたが、そのURLのページにアクセスしてもらいたい。そのページから論文がダウンロードできるようになっていることがわかるだろう。これによって多くの方に論文を読んでいただくことができる[11]。

このように、様々な場で発表し、論文を書き、発信していくことで、自分の考えをどのように表現できるのか、を考えることができた。地図を見て、行先を決め、コンパスで方角を見つつ、歩いていく過程と言えるだろう。歩いていく過程では、いろいろな人に出会う。面白そうな場所を教えてくれる人に出会ったことで、思っていた方向と違う方向に目標がずれることもある。目の前で通せんぼをしているように見える人に出会うこともある。基本は一人旅だが、同じ道に興味がある人とは、たまに一緒に歩いてみるのも良い。

８．研究は続くよどこまでも

さて、そろそろサバイバルガイドも終わりが近づいてきた。私は、このようにして、出来たばかりの観光創造というフィールドを歩いてきた。5年がたって、観光創造専攻を修了することになったが、無論研究に終わりはない。これからも、この観光創造というフィールドを歩き続けることになるだろう。場合によっては、地図を新しくしなければならないかもしれない、コンパスの性能を上げる必要が出てくるかもしれない。新たな人に出会い、横道にそれるかもしれない。立ちすくんでしまったり、またがむしゃらに走りだしたりするかもしれない。それは良い。ただ、「この世界に対する好奇心」だけは、どこかに忘れてくることのないようにして、今後も歩んでいきたい。

---

[9] Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers の略称である。

[10] 私自身がHUSCAPをどのように活用したかについての詳細は、『HUSCAPレター』20号をご覧いただきたい。

[11] ただし、学会によっては、こうした形での公開を認めていない場合もあり、注意が必要である。経験上、学会発表用の要旨やスライドについては公開が認められないことはあまりないが、査読論文については、公開が認められないことがある。登録の可否についてはHUSCAPのスタッフが学会に確認してくれるので、相談してみることをおすすめする。